少しの勇気

山手小学校六年　中里心葵

学童帰りの夕方妹と二人で歩いていたときのことでした。目の前で自転車にまたがったまま止まっていたおじいさんが、とつ然たおれこんでしまいました。あまりの出来事に、私は息が止まりそうになりました。「どうしよう、おじいさんが危ないかもしれない。」ときょうふ心が一しゅんでむねをよぎりましたが、同時に、「私たちが何とかしなくちゃ。」という思いが強くわき上がりました。周りを見わたしても、私たち以外はほかにだれもいませんでした。心細さでいっぱいでしたが、私はふるえる足を動かして、「大丈夫ですか。」と必死に声をかけ、重い自転車を持ち上げようと手をのばしました。しかし自転車にはコンクリートブロックが２つもつんであり、妹と二人でも持ち上げることができず、と方に暮れていると、通りかかった大人の人がすぐにかけつけてくれました。私は「助かった。」

と心の底からホッとしました。おじいさんは助けてもらう間、何度も「ごめんね、ごめんね」と苦しそうにつぶやいていました。その姿を見て、私はむねがしめ付けられるようにいたみました。助けてくれた人は、「熱中症か脱水症状かもしれないね」と言いました。私は妹と持っていた日がさをそっと差して、少しでも直射日光が当たらないようにしました。

しばらくして救急隊員が到着し、おじいさんは救急車で病院へと運ばれていきました。

そのきんぱくした空気の中、助けてくれた大人の人が「ちゃんと助けようとしてえらかったね」と声をかけてくれました。最初は、「自分には何もできなかった」と情けなく思っていましたが、その言葉を聞いて、張りつめていたきんちょうの糸が切れ、少しだけ救われた気持ちになりました。帰り道、私は今日の出来事をふり返りました。あのとき見て見ぬふりをしていたら、どうなっていたかわか

りません。私のほんの少しの勇気が、困っている人を助けるための第一歩につながったのだと実感しました。

私は今まで、人権という言葉をじっくり考えた事がなかったけど、だれかが困っているときに手を差しのべることが人を守ること、人権を守ることにつながると思います。それはとても勇気のいることで、きょうふを感じることがあるかもしれません。今回のおじいさんの出来事のように、一人では解決できないこともあると思います。そんな時は勇気を持って周りに助けを求めていこうと思います。

だれかを助けることは特別なことではなく、日常のすぐとなりにあるものだと気づきました。これから先、どんな場面に直面しても、私はいつでも勇気を出して手を差しのべることができる人でありたいです。

20 × 20